

変わる日本の「暮らし」と「まち」

小さな子ども図書館から始まる 元気なまちづくり

東京都葛飾区リリオ亀有
リノベーションプロジェクト
(2017年・平成29年)

阿部民子

text by Ranko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

マンガ「こちら葛飾区亀有公園前派出所」、通称「こち亀」で知られる、葛飾区亀有。JR亀有駅前には、主人公両さんの銅像やミニメントが建ち、写真を撮る観光客が絶えない。

その駅前に建つのが、13階建ての商業ビル、リリオ亀有リリオ館だ。コンサートなどが行われるホールや区の地区センターなども入居しているこのビルの7階に、この春、ユニークなミニ子ども図書館が誕生した。名前は、「絵と言葉のライブラリーミッカ」。

ちよやってミッカ」「楽しいことミッカ」からつけられたという。

「この施設は子どもの好奇心を刺激する特別な場所にすることを大切に作られました。絵や漫画、図鑑や写真集などを中心に、蔵書は現在3000冊。本を読むだけでなく、シアターでは読み聞かせ、アトリエではワークショップ、ギャラリーでは展示と、いろんな形で本への好奇心を刺激しています。居心地の良い空間にするために、建築や装飾など、さまざまなクリエイターにも参加して



図書館とは思えないほどのおしゃれな空間

前例のない公民連携

「ミッカが入っているリリオ館は、平成8年に亀有駅南口地区の再開発事業によって建設されました。それから約20年が経過し、いまいちどリリオ館を、亀有駅前を元気にしたい、という思いからリノベーションプロジェクトを立ち上げました。そこに葛飾区と民間企業に加わってもらい、公民連携プロジェクトとして生まれたのがミッカなんです」と語るのは、再開発事業の施行者で、リリオ館の区分所有者でもあるURの杉井学治だ。

連携のパートナーとなった葛飾区政策経営部政策企画課の塚本麻衣子さんは経緯を語る。

「亀有のまちづくりを考えるうえでも、この館の活性化は大きな課題でした。区としても、いままでも業務委託などの形態による民間企業との連携があったものの、チームの一員となって進める公民連携プロジェクトに参画するのは初めて。大きなチャレンジでした」

そこに加わったのが、自治体などとの共同プロジェクト経験が豊富なプロデュース会社、トーンア

ンドマター代表の広瀬郁さんだった。同社のディレクターで現在ミッカ館長を兼任する山本さんは、「立場はそれぞれ違いますが、プロジェクトにあたって皆が共通に持っていたのは、次の世代のために施設を」という思いでした。そのうえで、館全体にいい影響をもたらし、既存のお客さん以外も呼び込めるもの、いろんな世代が楽しめ、長い時間が過ごせる施設とは何かと考えているうちに出てきたのが、子どものための「図書館」というアイデアでした」と話す。

とはいえ、完全に公共の事業でもなく、民間の事業でもないプロジェクトは、葛飾区もURにも前例はなし。費用分担や役割分担など、シビアな局面もあったという。「フラットな関係を意識し、お互いを尊重して進めることを心掛けました。成功の鍵は、メンバーがビジョンを共有し、ぶれずに持ち続けたことだと思います」とURの杉井は成功の秘訣を語る。

「長いスパンで事業展開を考えることはもちろん、小学生以下を入館料無料にする設定など民間では

絶対にできません。そういう意味でも、互いが補い合ってこそその公民連携だったと思います」と山本さん。

オープンから半年。ミッカの利用者はのべ2万7000人を超え、リリオ館には新たに幼児教室やヨガスタジオなどが入居。チャレンジングな公民連携の成果は、予想以上の形となって現れ始めている。

愛着をもちいるまちづくり

平日の昼さがり。ミッカを訪れると、ハイハイの乳児連れや、幼児と遊ぶ親子でにぎわっていた。1歳の女の子を連れママは「小さな子どもも安心して遊べるので、よく来ています。この子が口に入れちゃうんで、家ではクレヨンが使えないんですが、ここだとアトリエゾーンで上の子がお絵かきしている間に、下の子をソファのあるリーディングゾーンで遊ばせられるし、子どもも喜んでいますね」と話してくれた。

館長の山本さんは「小学生が小さい子どもと遊んであげたり、学校と関係なく仲良くなったり、予想

外の化学反応もたくさん起こっています。今後は、外への発信も積極的に行って、ミッカや葛飾の魅力をアピールしていきたい。じつはいま、子どもたちが自主的に宣伝動画を作ってくれているんですよ」と笑う。葛飾区の塚本さんも「子どもが生き生きしているのは、すごく喜ばしいこと。ミッカでの経験が、まちへの愛着や誇りを持つきっかけになってくれればうれしい。そして、大人になっても葛飾に住みたいと思ってもらえたら」と話す。

「いろいろなところでまちづくりに関わっていますが、子どもが楽しく過ごせるまちが作れば、親は住む場所として選んでくれるのではないのでしょうか。このプロジェクトで得た経験のまちづくりに活かしていきたいです」とURの杉井。

小さな図書館が、まちの新たな可能性を大きく広げている。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作] 新潮社